

# 優秀賞

松澤 ゆい(まつざわ ゆい) 由木中央小 6年生

作品名: 自閉症という壁

図書: 自閉症の僕が跳びはねる理由

世の中には、様々な性格の人間が存在しています。心の広い人や心の狭い人、話すのが上手い人や、話すのが苦手、あるいは怖い人など、色々な人が出会ったり別れたりを繰り返して生きています。そんな中、「人と会話ができない」「言われた事に対応できない」という悩みを持ち、辛い思いをしている「自閉症」の人々をご存じでしょうか。私は、自閉症という言葉は知っていましたが、それがどんなに困難なものなのか、理解しようとしたこともありませんでした。

けれど、この本を読んで、障害に対する感じ方ががらっと変わりました。

東田直樹さん作の、「自閉症の僕が跳びはねる理由」という本です。この本の著者の東田さんは、会話をするのがとても困難な自閉症ですが、パソコン及び文字盤ポインティングによってコミュニケーションができます。

本の内容は、自閉症の人々に対する疑問に、本書を書いていた当時、十三才だった東田さんが一つ一つ分かりやすく答えていくものです。間にショートストーリーなどを挟んでいたりして、読んでいて全く飽きなくなっています。

この本で一番心に残った質問は、「みんなといるよりひとりが好きなのですか？」です。

その理由は、東田さんがこう答えたからです。

「『いいのよ、ひとりが好きなんだから』

僕たちは、この言葉を何度聞いたことでしょうか。人として生まれてきたのに、ひとりぼっちが好きな人がいるなんて、僕には信じられません。(中略)僕たちだって、みんなと一緒にいいのです。だけど、いつもいつも上手くいかなくて、気がついた時には、ひとりで過ごすことに慣れてしまいました。ひとりが好きだと言われるたび、僕は仲間はずれにされたような寂しい気持ちになるのです。」

この言葉がとても重くて、心を打たれました。東田さんは、周りに誤解されて悲しくても、その辛さを親にも相談できずに、ひとりになってしまいました。だから

こそ、この本には思いが詰まっっていて、私達の心を揺さぶる文章が書けたのだと思います。

他に、本の中にいくつかあるショートストーリーと短編小説の中に、「側にいるから」という物語が感動しました。

その物語は、駿という男の子が車にはねられてしまう事から始まります。天使のおじさんと共に天国へ行き、幸せな日々を過ごすつもりでした。けれど駿は両親が気が狂ったように泣き叫ぶ姿、母が命の危機にまで追い込まれている姿を見てしまい、駿は耐えられなくなりある切ない決意をします。その結果がハッピーエンドかどうかは、読み手次第ではないでしょうか。著者の東田さんは、「自分の愛する人に気持ちを伝えられないことが、どんなに辛く悲しいことかということを、分かってもらいたくて書いた作品」と言っていました。

この本を読む時には、ショートストーリーの出来事も自分に置きかえて考えてほしいです。東田さんの伝えたい気持ちが分かるかもしれません。

東田さんは、理解されにくかった自閉症の人達の心の内を共感を得れるような分かりやすい言葉で伝えたことで注目を浴びています。そしてついに、外国の大物作家により翻訳されました。現在は28か国30言語で翻訳されて、世界的ベストセラーになりました。本だけでなく講演活動にも取り組んでいて、沢山の人の心を動かしています。

もしかしたら、自閉症という壁がなくなるのも、遠い未来ではないかもしれません。そのために私たちも、苦い思いをしている人達に耳を傾けないといけないのです。理解しあいながら幸せに生きれるように協力しようと決意しました。